
dreamers ~追憶の王~

ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

dreamers~追憶の王~

【NZコード】

N3654D

【作者名】

こひり

【あらすじ】

ある出来事をきっかけに心を閉ざしてしまった主人公「ナイク」と彼が幼い頃に拾ったぬいぐるみ「紅蓮」。彼らの「夢」の冒険が始まる。

第〇夢「プロローグ」（前書き）

多少刺激の強そうな表現が物語にときどき入っていますので苦手な
かたは、「遠慮ください。」

第0夢「プロローグ」

モノクロの世界

昔見た彩りも忘れ。

今、彩りうともせざ。

ただ、ただ平坦な道を選び、進んで来た。

肉体は

より安直な方を好んで歩き残つた心は
ダイヤモンドの様に堅い鎧に包まれ、死を待ち遠しく思つてゐる。

今まで自分の何もかもを
オブラーートに包んできた

彼の名は

メノ ナイク

夢野 無幾

□

14歳

ただ死を待つ
哀しき少年。

何故彼は

全てを隠しているのだろう

懸命に生きようとしないのだろう。

頼るべき者がいないのか？否、彼には彼を愛し続けた母がいる。

父は、彼が生まれた後すぐに事故でなくなってしまったが、母は彼を捨て逃げたりはしなかった。

では、何故彼はその心を閉ざしてしまったのだろうか？

彼の部屋にはその全てを知る者が息を潜め、そつと坐している。そして、夜も更けると動きだし「夢の王国」への鍵を探している。

その者の名は「紅蓮」

れあれあ、続^きは彼らから直接聞い^いつじやないか！…ぐずぐずしてはいられない夢が覚めてしまつ前に冒險の旅へと出掛けよう。

第1夢「ワカレ」

つまらない。

「一体」の世界のどこが面白いのか分からぬ。

ねえ・・・誰か教えてくれませんか？

第1夢～ワカレ～

僕は

買い物が嫌い

なぜなら・・・

わざわざ人の多いところに行かなくちゃいけないから

僕に関わる人が嫌い

なぜなら・・・

その人達の前では、頭が良くて、スポーツなんでも出来て、可愛い
彼女がいる「夢野 無幾」を演じなきやならないから。

僕の全ては「嘘」というオブラートにずっと包まれたまま。
気が付いたら3年という月日が流れてた。

「ねえね！ナイク見て！」

「ん・・・」

「これ！可愛い」

「うん・・・そうだね」

田曜日のショッピング街。溢れる人込み、幸せそうな話し声。

「（あー、来るんじゃなかつた）」「

「今、何か言つた？」

「いや、何にも。それ買つてくるよ」

ナイクは彼女のユイが持つっていたネックレスをスッと取り上げた。平日こそ学校に出ているが、それ以外は余り外で過ごすことはない。昔から誰かと関わりを持つことを極端に嫌がっていた。

今日のデートもユイの方から「付き合つて1年になるから」とメーレが着て、なんとなくその気になつてみただけだった。

「え？いいよ！だつてこれ高いし・・・」

「いいよ。久しぶりに出掛けたんだし、このくらいはね・・・」

「あ・・・うん。アリガト」「（せつせつ会計して、はよ帰ろ）」

会計の人にネックレスを渡す、何も考へていなかつたせいか「プレゼントですか？」
と言つ質問にいつのまにか「はい」と返事していた。
商品がラッピングされている間

「いかにしてユイを言い包め早く帰るか」を考えていた。
支払いをして、綺麗にラッピングされた商品をもらつ。
別にたいしたものでもないのに、店の人はメッセージカードとボーナス

ルペンを差出して

「一皿どつも」といつてきた。

「（たて、何を書い「うか）」

ふと、ユイの方に目をやると僕が遅かつたせいか
ちらりを見ていた。

心配やうに

「（こつとも、迷惑かけてるな）」

カードに「ありがと」を、かいてみた。

そして、その前にもう一言付け加え、店員に渡した。カードを受け
とった店員は少し青ざめた様子でカードをプレゼントに飾りナイク
に渡した。

「じめん。待つたよね」

「うん、大丈夫！少しだけ心配だつたけどね」

「うう。・・・はい、これ」「あー可愛くラッピングしてもらつた
んだ、あつがとう。ナイク」

「どうも」

ユイは本当にうれしそうな顔でプレゼントを受け取ると
すぐにカードの存在に気付いた。

「ナイク、これ・・・」

「うん。・・・あのわ」

ナイクは今作れる最高の笑顔でユイに伝えた。

「別れよ。じゃね、バイバイ」

そう
ゴイの持つているカードには、「今までありがとうございました」と書いてあつたのだ。

「ただいまー」

「ナイト、おかえり 久しぶりのテーートはびつだつた?」

「別れた」

家に帰ると嬉しそうにナイトを出迎えてきた母、アケミは息子のことをばに啞然とした。

「え? 今何ていつたの。」

「・・・」

母の問い合わせに応じる事無く、ナイトは一階の自室へと向かう。
アケミは、そんなナイトの様子を一切気にせずひたすら色々な事をナイクに問い合わせた。

なぜ別れたのか、どこに掛けたのか、楽しくなかつたのか、喧嘩してしまつたのか・・・ナイトが部屋に着くまで後を追い掛け、問い合わせた。

しかし、ナイトは口を開かない。ドアノブに手が掛かつたときアケミはもうダメだと思った。

不意に、ナイトがこちらを見て笑いかけた。

「ほりほりかにも優しそうな表情で口を開いた。

「もー、母さんは心配性なんだよ！ そんなだから皺も増えるんだ」

「なっ！？」

想像もつかないナイクの言葉にアケミは返す言葉が見つからなかつた。

「まあ・・・一応、傷ついてるんだから、あんまりえべるような事きかないでよね」

バタンッ

その言葉を最後に、ナイクの部屋のドアが閉まり、一人の間を遮つた。

つづく

第1夢「ワカレ」（後書き）

これから頑張ります。

第2夢「デアイ」

ナイクの部屋は、西側の窓から入ってきたオレンジ色の光がぼんやりと照らしていた。

十一

深くため息をつくやつと、やつと一日が終わつたのだ。
底なしの安堵感がナイクを包んでいた。

よく他人は、孤独は嫌だという

らはナイクの部屋とは違う

おやじく母のアケミが昼間に布団を干したのだわ。と思つた。急にまぶたが重くなると、赤子のようにナイクは眠りに落ちた。

・・・おーーい、起きんかーー！」

- 1 -

突然の怒鳴り声と、頭痛で目が覚める。

急いで起き上がり辺りを見回すが、外が暗くなつていてよく見渡せなかつた。

明かりをつけて、再度みる。

以外変化は見られないが、たぬいぐるみ。幼い時に拾つた物だつた。

一見、犬の様なぬいぐるみで、当時は名前をつけていたが忘れてしまった。

「なんで落ちてんだよ・・・ったく」

「ぼやきながらもそのぬいぐるみを拾い。つと

「『・・・つたぐ』じゃねえつのはーーー」

「いたつー」

パシッとナイクの頭を何かが叩いた。

驚いたナイクはぬいぐるみを手から放してしまった、が
ぬいぐるみは見事に体制を立て直して着地した。

途端にナイクをにらみつけ、叫ぶ。

「しけた顔して入ってきたと思ったたら俺に挨拶もせずに寝やがって」「んな・・・ぬいぐるみに挨拶なんかしねえよ。つーか、なんだよ
なんでぬいぐるみが・・・」

突然起こつた出来事にナイクはわけが分からなかつた。
もしかしたら、自分はまだ寝ぼけているのかもしれない。
そう思い、頬をつねるが、じーんと地味に痛みを感じただけだった。

「言つとくが、コレは夢じゃないからな」

「誰が信じるかよ」

「頬は痛かつただろうが?」

「・・・母さーー・・・・」

「親を呼ぶなんて、お前のプライドが許さないんじゃないのか?」

「なんで知ってるんだよ」

「それはだなあ」

「ホンと小さく咳払いをすると、ぬいぐるみは自信ありげに胸を張つた。

「俺様が魔法使い様だからだ。そして、お前が魔法の国ドリームキングダムの王様候補だからだ」

「・・・つやくさ。」

「何？！ほ、他にも知ってることは山ほどあるが、たとえば今日、お前はふられたのではなく・・・」

そういうと、様子をうかがうようにナイクを見るぬいぐるみ。

「お前から、彼女をふったこと、とか

「なんでそこまで分かるんだよ」

お前。何も見てないだろが、とナイクは続ける。が、だんだんと声が小さくなっていた。

先ほどから繰り広げられている非現実的な現象の前ではありえないなんてことは無いような気がしていたからだ。

「ふん、そんなこと、聞かなくても分かるだろうが。」

「ああ、はい、まあ、なんとなく。っていうかぬいぐるみは動き出しそし、説教されるし、おまけに魔法使いだとかなんとか言われたんじゃ、もう何が起きても驚かないと思う・・・」

「待て、大事なことが抜けているぞ」

「は？何」

そう聞いた途端、何かものすごく嫌な予感がナイクの脳裏をよぎつ

た。

しまつた、聞くんじゃなかつた。と思つた。

ぬいぐるみは、また「ホンと小さく咳払いをすると、真っ直ぐナイクを見た。

「お前が、王様候補だといつことだよ・・・夢野無幾。」

続。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3654d/>

dreamers～追憶の王～

2010年11月16日12時09分発行